

第2回 京都市交響楽団ビジョン（仮称）検討会議 摘録

日時：令和元年7月8日（月） 14：00～16：00

場所：京都学・歴彩館 小ホール

【議事】

- (1) 新任委員紹介
- (2) ビジョン原案の説明
- (3) 協議 ビジョン原案について

【協議記録】

1. ビジョンの位置付け・基本理念・京響の目指す姿について

① 記載内容・表現について

- わかりやすい記載・構成について
 - ・ 格調高い文章を作っているが、中学生が読んでもわかるくらい、わかりやすく書いて欲しい。社会全体がクリエイティブな営みをリスペクトできるようになって欲しいという思いがある。
 - ・ 第一印象として、難しいと感じる。市民と楽団員が共有することができるか、市民が読んだときに楽団を応援したいと思えるものであるかどうかという点で疑問がある。楽団員へのアンケートでは、「市民に愛される、誇りに思ってもらえる楽団」という言葉が多く見られた。同時に市民もそれを望んでいると思う。そういった内容が必要なのではないか。
 - ・ 以下の3つを誰もが理解・共有して、みんなのものとできる事がよいのではないか。
 - 1) 都市にとっての在り方。文化芸術都市・京都にとって、どのようなものであるのかということ。
 - 2) 市民から見てどういった存在か。市民にとって誇りであり、愛されているということがわかること。
 - 3) 楽団としての理想。世界に誇れるオーケストラを目指す、あるいは理念とすること。
 - ・ 箇条書きで、子どもでも覚えられるような端的なものできないか。

- 教育，人をつくる

- ・ ビジョンを策定することに留まらず，次年度以降，楽団員の胸にしっかり刻むべきものが作れば良いと思う。子どもからお年寄りまでの幅広い人への情操教育・生涯教育のような要素が記載されると良いように思う。
- ・ 教育という言葉は上から目線のニュアンスとなりかねないので，「人をつくる」などの表現が良いのではないか。

- 主語の明確化

- ・ 主語を明確にしてほしい。財団・楽団・市などの主体が果たす役割を書く方が良い。
- ・ 京都市民が京響を世界に誇れるというのは良いが，京都市交響楽団が自身を世界に誇れるということ，少し違和感がある。

- その他

- ・ たたき台としてはとても良い。「共に響きあう」という言葉は非常に共感できる。

② キャッチフレーズについて

- ・ 広島市交響楽団の理念は非常に明確で，「平和のための楽団」である。京都市交響楽団にとっての，そういったフレーズが掲げられれば良いと考えて「キャッチフレーズ」の枠を設けているが，具体案を見つけることが非常に難しい。
- ・ 伝統と革新は京都の素晴らしいと感じる要因である。伝統があり，革新が起こせるということが京都の強さだと思っている。
- ・ この町には揺るぎない強さがある。伝統なのか，歴史なのかはわからないが，東京の方がずっと大きい都市であるにも関わらず，揺るがない強さがある。
- ・ 精神文化，こころ，祈りというものが大きいように思う。
- ・ バーミンガム，ウィーン，ベルリンは HP で見た範囲では，キャッチフレーズはなかった。

③ ビジョンの位置付けについて

- 「共に響きあう」のキーワードについて

- ・ 一方からの発信ではなく，観客・市民がいてこそその者であるという視点が欲しいと言う意図で，「共に響きあう」というキーワードを入れて欲しいと言っていた。ビジョンの位置付けの冒頭にもしっかり掲げて欲しい。
- ・ 「京都コンサートホールに足を運んでください」という姿勢ではなく，楽団員から積極的に発信する姿勢が重要ではないかと思う。

- 「西洋のオーケストラ」の表現について
 - ・ 「西洋のオーケストラ」とあるが、クラシック音楽は西洋のものだという感覚は我々の世代にはないと思う。
 - ・ 今日、世界的にオーケストラのレベルは高くなっているが、オーケストラが西洋に起源を持つことは確かである。1956 年というまだオーケストラに馴染み薄い時期に京都市長が京都市につくろうという理念を持ったことは凄いことであったと思う。その文脈も踏まえて、京都の「和」に対になる表現として、敢えて「西洋の」という言葉を残しても良いのではないか。
 - ・ 「日本」という言葉と対照的に「西洋」を用いていることはわかる。そういった対照を残すのであれば、「西洋発祥の」や「インターナショナル」などの表現が適切ではないか。
 - ・ 敢えて「西洋の」という言葉を選んで記述していることが伝われば良いのではないか。

④ 京響の目指す姿について

- ・ 「楽団員が持つ高い演奏力」とあるが、ここで言いたいメッセージは、京都市交響楽団の現在の演奏力が高いということではなく、今後も演奏力を向上していくということであると思う。向上を目指さなければ必ず水準は落ちていく。テクニックやクリエイティビティなどの面で更に上を目指すと言う姿勢を打ち出す方が望ましいのではないか。

2. 目指す姿を実現するための戦略

① 構成について

- ・ 現在の 2 つの戦略では 1 つの戦略で受ける内容が広すぎるし、重なりが出てくる。5 つの政策の柱を戦略としてはどうか。

② 情報発信について

- 国際的な情報発信の姿勢について
 - ・ 真に国際的な楽団となるために、世界の人に名前と演奏を知ってもらうことが大事だと思う。音楽が好きな方でも京都にオーケストラがあることを知らない人もいる。良い演奏をしているところをもっと世界に発信できないか。HP をグローバルに対応することや、観光客へのアピール、YouTube などでの発信を多角的に行うことが大事ではないか。
 - ・ ヨーロッパには東洋のオーケストラを呼ぶお金と興味がなく、たとえ演奏力が高くても呼ぶ可能性はほぼない。そういった実情は理解して欲しいが、発信を行う努力はすべきである。

● 京都市の文化シーン全体での情報発信について

- ・ オーケストラ以外にも、様々な文化プログラム等を一箇所で深く知ることができる情報発信ができると良い。何カ国語にも対応すると維持が大変であるが、日本を訪れる観光客の約半数は英語を理解できると考えられるため、英語でそういったプラットフォームを構築してはどうか。
- ・ 京都市内で開催される伝統芸能・美術館・オーケストラ・演劇等のイベントを冊子にまとめ毎月発行し、ホテルに配布するのがよい。英語版もあると望ましい。
- ・ 全市的な施策としてスポンサーを見つけて実施できれば良い。

● 情報発信の媒体・ツールについて

- ・ HP にアクセスできない人にも情報発信できるメディアも重要である。
- ・ 地下鉄の烏丸御池駅に京都市交響楽団の宣伝を出しており、立ち止まる人も多い。JR 京都駅に京都市交響楽団のポスターを貼る等できるとより効果的ではないか。
- ・ JR の駅に簡易的なステージを設置し、楽員が生演奏を行い、公演の情報を PR できれば良い。
- ・ 京都駅にポスター掲示やステージの設置をお願いするのであれば、JR にとってプラスになることを示す戦略が必要であろう。
- ・ 地下鉄は市営なので、チラシを貼るだけでなく、アナウンスを流すといった PR も可能ではないか。
- ・ JR の駅、TV・ラジオの放送局が一番効果的だと思う。
- ・ 海外の著名なホテルではコンシェルジュがその街のことを全て把握している。コンシェルジュがオペラやオーケストラの公演チケットを持っていることもある。京都には大きなホテルがあるので、そういったホテルのコンシェルジュを集めてコンサートを聴いてもらって、情報を発信してもらえるようにすれば効果的ではないか。
- ・ 宣伝は事務局スタッフの仕事だと決めつけるのではなく、どれほど小さい事でも良いので、楽団の全員がファンを増やす努力を始めることが必要ではないか。

● スタープレイヤーの育成、楽団員個人を取り上げる取組

- ・ サッカーや野球の HP には、名前をクリックすると写真が出て親しみが湧くような仕掛けがあるものも見られる。幅広い方に興味を持っていただく契機となる内容を発信できると良いのではないか。
- ・ コンマスや首席奏者の顔と名前を売ると、固定のファンを捕まえやすいのではないか。売り出す人にフィーチャリングした演奏をしたり、面白い人に司会をしたりするなどの取り組みをしてはどうか。そういった取り組みが事務局側からでなく、楽団側から出てくると良い。

- ・ コンマスや首席奏者は、自分のパートを引っ張っていくことを求められている。窓口になる人・スターを作ることには、意識的に取り組むことが必要である。またスタープレイヤーや楽団の核となる人が、意識的に取り組むことによって、楽団全体の演奏力の向上にも繋がると思う。
- ・ 楽団の中にも人に知られて覚えられたいという人と、そうしたくないという人がいる。しかし、個人的には楽団を知って欲しいと願い活動する以上、個人を知ってもらうことを通じて楽団に親しんでもらうことも必要だと考える。
- ・ メンバーを知ってもらうことには個人的には抵抗は感じないが、一方で、個人情報保護する姿勢は必要である。

③ 楽団・楽団員に対する市民からの理解の促進と楽団員としての自覚・責任

- ・ 費用対効果が無いから不要であるという議論をされると難しい。オーケストラとは元来、費用対効果の良いものではない。これ以上公演回数を増やすことも難しい。そういった状況を市民に理解してもらえているのかということは疑問である。
- ・ 京都市交響楽団の楽団員は収入の面でも非常に恵まれているものの、一般的な収入の水準から見ると高いものではない。
- ・ 私生活を贅沢にしたいという思いもわかるが、我々は今でも良い生活をしていることを自覚すべきである。もっと社会に対する活動をしようという思いを持つべきではないか。合奏の練習が一日に4時間ならば、一日4時間労働をしていると思われるということを楽団員には肝に銘じて欲しい。今まで京都市交響楽団員は京都市の準職員の扱いを受けてきた。一般的な市職員の半分の時間しか拘束されていないわけだから、残りの時間に何をしているかということが市民に問われている。
- ・ 音楽家として暮らしていると当然だと思っている生活は、そうではない人からすると驚くべき生活である。合奏の4時間の練習のためにどのような生活を送っているか、どれくらい準備をして、どのようにリラックスして、どのように緊張と付き合うのかといったことを発信できないか。身近に感じてくれる人もいるかもしれない。ファンを増やすことになり、サポートもしてもらえと思う。音楽家は収入に見合わない高価な楽器を買い、プライベートの時間を使って練習しているが、そういったことは伝えなければ伝わらない。

3. 次回以降の論点について

- ・ アンケートを見ていて、楽団員の中に年休の取り方や働き方について不満に思っていることが現れている。それは戦略2に関連した内容だと思う。給与実態や働き方について事務局に資料を出してもらったうえで、次回に議論したい。
- ・ チケットは5,000円がギリギリだという根拠をデータで示して欲しい。昨日の演奏が5,500円と聞くと安いと感じる。また消費税が上がるということは、実質的な減収にもなるので、値上げは検討すべきである。
(事務局)現在の5,000円というボーダーラインは肌感覚に頼っている部分大きい。
- ・ 東京のオケでは昼間の公演に力を入れている。昼間の方が客が入ることもある。ただ、京都は自営業が多く昼間は入らないなどがあるのかもしれない。昼間に客が入らない理由がわかるようなデータがあると良い。もし京都では昼のオーケストラの公演に動員が見込めないのであれば、昼には数名の楽員によるアンサンブル公演などで京都市交響楽団を知っていただく機会を増やすことに注力する方が合理的であるかもしれない。
- ・ 様々な問題があるが、いかに優秀な楽員を集め、いかにレベルを上げるかということだと思う。楽員関係者が3名もいるので、この場を最大限活用するためにも、ぶつかることを恐れずに本音で議論できると良い。
- ・ 基本理念を作りなおし、それに賛同できない人には厳しい言い方だが去ってもらくらの姿勢が必要だと思う。1～2%の悪貨が良貨を駆逐するということもある。
- ・ 理想と妥協点について正直に話し合う事が必要であると思う。理想に対する現実があることはわかるが、現実を知ったうえで議論をすべきである。

以 上